

# **2012**

**The War for Souls  
by Whitley Strieber**

2012:THE WAR FOR SOULS

By

WHITLEY STRIEBER  
COPYRIGHT ©2007 BY  
WHITLEY STRIEBER

Translated by

Kazumi Yasuhara

First Published 2007 in Japan by  
ENTERBRAIN, INC.

Published in agreement with the author,  
c/o BAROR INTERNATIONAL, INC.,  
Armonk, New York, U.S.A.  
Through OWLS AGENCY, INC.

ロバート・アントン・ウィルソンの思い出に

第一部 やがて地は闇におおわれ

われらとともに昇りし魂、生命の星は、  
かつて何処かに沈みて、  
遙かより来れり。

過ぎ去りし昔を忘れしにはあらず、  
また赤裸にて来りしにもあらず、  
栄光の雲を曳きつつ、  
われらの故郷なる神のもとより来りぬ。

ウィリアム・ワーズワース

『幼年時代を追想して不死を知る頌』オード（田部重治訳）

超自然などありはしない。あるのはただ自然界のみで、  
人はそのすべてに接することができる。魂は自然の一部である。

マスター・オブ・ザ・キー

（マスター・オブ・ザ・キーとは、一九九八年六月六日、著者の前に出現した謎の人間（の姿をした者）だといふ。トロントのホテルの部屋に現れ、精神世界から環境までさまざまな事柄について彼に教えたと言われる）

プロローグ

十一月二十一日 闇のレンズ

マーティン・ウインターズは、クフ王のピラミッド内部には何度となく入ってきた。だがそのたびに同じ驚異に打たれ、同じ閉所恐怖に襲われる。いまここでおこなっている調査は考古学界に革命を起こすだろうし、それじたいは心躍ることだ。とはいえ、ピラミッドの真下の狭い地下室においていくことを思うと恐ろしかった。

目当ては、石と石の接合面の奥を削ってサンプルを採取することだ。それを質量平均崩壊法による新しい年代測定法にかければ、最後の謎が解ける。この三年間、ユーライアにあるカンザス州立大学の彼の研究室では、この方法を用いて南米の十あまりの遺跡の年代を測定してきた。九か月前からは大ピラミッドの調査をしているのだが、その結果は矛盾だらけだった。世界中の考古学者は、従来の定説をくつがえしてきた測定結果をはねつけたくてもうずうずしていたから、その測定法には欠陥があると、ここぞとばかりに騒ぎ立てている。

マーティンらの調査結果によれば、ピラミッドは数年で建造されたのではなく、少なくとも四段階に分けて、数千年にわたって建造されたものであり、遅くとも六千年前には着工されていたことになる。第四王朝のファラオ、クフの名が書かれている部分はたしかにその時代のものだが、ピラミッドの基部はクフの治世より三千年も古い。

そこで、今度はピラミッドの底にある地下の間——さらに古い時代の玄室げんしつだったとされている——を調べようというわけだ。おそらくはこれで、このギザ台地の調査を締めくくることができるだろう。というのもこの地下の間は、この台地に築かれた最古の建造物と考えられているからだ。

彼が調査した遺跡はもうひとつあった。オシリス神殿と呼ばれる非常に古い建造物で、エジプトの再生の神オシリスをまつる儀式がおこなわれていた場所だ。

大騒ぎになるのは目に見えているから、その調査結果はまだ発表していない。自分の手法を批判の嵐にさらすのは気が重い。あの神殿が一万八千年前から二万年前に建造されたという証拠を明らかにしたら、さんざん叩かれるのはまず避けられない。彼はまた、そのスフィンクスの年代も測定しようとしたが、こちらは一個の石灰岩から削り出したものだったため、サンプルが採取できなかった。ほんの小さい石のかけらがあればいいのだが、ただそのかけらは、建造時に石工のみに削られ、その直後にほかの石に押しつけられて、その後ずっとそのままになっていた部分から採取しなくてはならないのだ。

目の前に、下降通路の入口がぼっかり口をあけている。政府は問題の地下の間に一般人が立ち入るのを禁じているが、それにはもっともな理由がある。パニック状態で運び出された観光客はひとりやふたりではないし、空気が悪くて窒息の恐れもまちがいにない。言い伝えによれば、ここはエジプトの神官が通過儀礼しじに使っていたとも言われている。どんな恐怖に襲われても克服できるように、ということらしい。

「行くぞ」懐中電灯がつくのを確かめながら言った。「よし、行くぞ」とまた言った。

アーメド・マフーズがくすくす笑った。「よし、行けよ」

「うるさい、なんだったらきみがおりてみる」

アーメドは声をあげて笑った。「そいつはおれの機械じゃないんでね。世界中がそのせいがかかしてるみたいだし」

アーメドはエジプトで一、二を争う考古学者であり、しかも科学技術にも強くて、質量平均崩壊年代測定法が非常に精度の高い測定法なのをちゃんと知っていた。実際のところ、これは年代測定法のいわば「聖杯」だった。なにしろ、石が最後に加工されたのがいつか測定できるのだ。もっともそれには、その石が加工後空気にいっさい触れていなければ、という条件がつく。だから、こうして建造物の奥深くにもぐり、石の接合部をドリルで削ってサンプルを採取しなくてはならないのだ。

インカ人は宝石細工師のような精密さで石をびったり合わせていたから、ペルーではサンプル採取は楽だった。しかし、ピラミッドやオシリス神殿では、音波探知機を頼りに慎重に削らなくてはならない。というわけで、今回も相当の装備を持ってきていた。

下降通路は狭くて真つ暗で、おりる者には狂気が取り憑く。

「無線チェック」十歩と進まないうちに口走っていた。

「気が早いな、マーティン。入ったばかりじゃないか」

「すまん、アーメド。なあ、生きて帰ったら一杯おごってくれよな」

「ピラミッドはもう何千年も前から立ってるんだ。きみに言わせりゃ、いままで言われてたよりず

つと前からそうだったんだろ。なのに、よりによって今日崩れるわけがないじゃないか」

決まりの悪い思いで、マーティンは奥へ進んだ。たちまち静寂に包み込まれる。静まりかえった穴にはこれまで何度も入ってきたが、こんな静寂は初めてだ。

どこがちがうかと言えば、悪意を感じるのだ。人がここにいるのを知っていて、ずっと待っていたかのような、いまにも呑み込もうとしているかのような。知性があるかのような。

ばかな、ただの気のせいだ。ここに、邪悪なものなど存在しているわけがない。それを言うなら、そんなものはどこにもいない。幽霊も神もない。六百万トンの石の下、細いトンネルのような通路をおりていこうとすれば、だれしも多少は変な気分になるといっただけのことだ。

古代エジプト人がばかでなかったことだけはまちがいない。こういう効果のことを知っていて、だからここに地下の間を作ったのかもしれない。古い墓と考えるのが妥当な線だろうが、ほんとうのところはわからない。部屋の半分は、粗削りの石を積んだおかしな台が占め、台には取っ手のような岩のこぶがついている。どう見ても石棺を置く台ではないし、部屋の残り半分も同じくらい変てこだった。床に深さ二メートルほどの斜めの切り込みがあるのだ。とはいえ、この地下の間の壁のなら、調査に不可欠のびったりした石組みが見つかるだろうとマーティンは期待していた。

いよいよ目当ての部屋にたどり着いた。ピラミッド基部の地下二十五メートル弱。空気はよどんでひんやりしていた。ねっとりしていると言ってもいい。マルチガス検知器によれば二酸化炭素濃度が高いが、基本的には安全だ。用意してきた非常用酸素ボンベには一時間分の酸素がある。この閉鎖空間の酸素をすっかり使いはたしたとしても、余裕で撤退できる。もっとも、最悪の事態が発

生じた場合は窒息死を先送りできるだけだが。

「着いた」無線に向かって言った。

応答がない。うんともすんとも言わない。

「アーメド！」

「失礼、先生。<sup>エフエンディ</sup> ゆっくりお茶を飲んでたもんでね」

「こつちの身にもなつてみる！」

「わかつてるよ、だから笑わせてやろうと思つたんだ」

アーメドはいい男で、科学者としても優秀だが、文化的な溝の深さはどうしようもない。向こうはイスラム教徒だし、彼が子供のころここはトルコ占領下で、いまは英国人に支配されているのだ。

「あのな、ぼくはアメリカ人なんだぜ」マーティンは言った。無線で悪ふざけをしている場合ではない。

大きく息を吸った。もうひとつ吸った。装備を入れたバッグをあげ、レーダーを取り出した。これは石灰岩を深さ三メートルまで探査し、そこにあるものを詳細な映像にして送ってくる機械だ。早い話が、石組みの継ぎ目をこれで見つけようというわけである。

継ぎ目が見つかったら、小さなドリルを差し込み、三ミリほど奥から接合面の石を削り取るつもりだった。

懐中電灯でまわりを照らしたりはしなかった。なにがあるかはわかってるし、四方の壁がどれだけ迫っているか、いまさら見てもしかたがない。だが、天井の高さは三メートルあり、通廊とち

がって身をかめる必要はなかった。

腰痛は考古学者の職業病だ。仕事をするには身をかがめ、折り曲げなくてはならない——それも何時間もぶつ通しで、狭苦しい場所。歳をとるにつれて、それがだんだんこたえてくる。彼はいま三十四歳だが、まだそれほどには感じない。水泳、スカッシュ、テニス——と、まあ言ってみれば、妻のリンディのおかげだ。腰痛知らずでたっぷり使っているし、その証拠に家には子供がふたりにいる。そしてその妻のほうだが、いまは世にもまれなあつと驚く大仕事を手に入れようと奔走している。アメリカ航空宇宙局（NASA）は二〇一〇年、UFOの一部はまちがいに知的生物によって操縦されている、おそらくは地球外生命か、パラレルワールド並行宇宙のものだろうと発表した。国際高度推進技術研究会議は、以来その構造解明に躍起になっている。

妻はその会議に参加したくて、科学者間の政治的駆け引きにどっぷりつかっているのだ。

〈USニュース〉誌の大学ランキングで底もいいところ、ページに入りきらなくて折り畳みページの一番下あたりに載っている、そういう大学の一教授にそんなことができるものだろうか。しかし、この惑星から人類を大々的に飛び立たせるという考えに、妻はすっかり夢中になっているのだ。

いっぽうマーティンのほうは、考古学界という体制の内側も内側で仕事をしている。彼なりにつつましく起こしている革命が、学界内に激しい反発を引き起こしているのはそのせいだ。だが、現実問題として数字は疑いようがない。人類史は書き換えられなくてはならない。これまで調査してきた謎の多い古代建造物は、どれも従来言われていたよりずっと古かったのだから。

見守るうちに、やっとレーダーのコンピュータが動きだし、小さな画面に高感度画像を送ってき

た。「画像が出た」彼は無線に言った。

「いいぞ。ぴったり時間どおりだ」

帝国古代遺跡省から許可されたのは、午前四時から五時の一時間だけ。夜明けのピラミッドツアーが始まる前だ。観光客にピラミッドが開放される時間帯に、ここらをうろつかれては困るということらしい。金にものを言わせてなかにおりようとする者はおそらくいるものだし、そういうときに考古学者がここで調査などしていたら興ざめだ。また言うまでもないが、お祈りのためにしろなんにしろ、わざわざ心付けバシシを払っておりきたばかり者が、危険に巻き込まれる恐れもある。

時計をちらと見た。きっかり四時半。ドリルで穴をあけ、サンプルを削って引き出すのに多少時間がかかる。ぴったり時間どおりと言うより、ぎりぎり時間どおりというところだ。

レーダーの小さな画面に映る情報は、慣れていないと読みとりにくい。彼は狭い台の二段めにびったり身を寄せ、深さ六メートルの穴に落ちまいとしていた。この穴は、まず十九世紀にイタリアのカヴィリアが掘って、そのあと英国の探検家——それとも盗掘人だったか——のハワード・ヴァイズが掘ったものだ。画面の緑色の映像がちらついた。明るく光っているのは石が高密度になっているところ、暗いのは密度が低いところだ。

やがて、探していたものが見つかった——暗いまっすぐな線。まちがいに接合面だ。こういうことは、壁の表面を見ただけではわからないものだ。ここは長年、もともとここにあった石灰岩をえぐって作られた部屋だと思われていた。しかし、上からレーダー画像で調べてみたら、地下に人工的な壁があることが判明し、この壁は切り出した石を積んで作ったものとわかったのだ。

「掘削開始」

「了解」

ドリルの細長い刃を取り出し、ドリル本体に取り付ける。この刃は一本三万ドル。この世で最も硬い工具鋼製で、先端にはダイヤモンドがついている。ヌープ硬度九二〇。直径は針三本分ほどしかないから、穴をあけるにはよほど硬くなくてはならないのだ。

作業を進めながら、ふと不思議に思った。これよりさして太くない錐で、古代エジプト人はどうやって鉄鉱石より硬い閃緑岩せりよくかんの壺をくり抜いていたのか。このドリルでさえ閃緑岩には歯が立たない。いまでも花崗岩に出くわして、刃を冷やすためにいったん作業を中止しているところなのだ。刃は三本持つてきているが、全部だめにして予算を食いつぶすのは願い下げだ。掘りたいところは世界中にある。リンディは人類を宇宙へ連れていくかもしれないが、こちらは歴史を書き換えているのだ。これまた重要なことである。

そのとき、かすかな震動に気づいた。足の下から伝わってくる。

「アーメド？」

「どうした」

「なんか……おかしい。震動がする」

「ドリルが共鳴を起こしてるんじゃないのか」

「かもしれない。でも、いまは止めてあるんだ」

じっと立っていると、震動が脈動に変わってきた。速くて、規則的で、機械のような。そんなは

ずはないと知らなければ、この部屋の下どこかでコンプレッサーかなにかが動きだしたと思うところだ。

カイロのどこかの工場が、今日の操業を開始したのにちがいない。石灰岩台地全体が、なにかそういう理由で震動しはじめたのだろう。「わかった。街の騒音だ。工場かなんかの」

「そう言えば、製造機械工場が一キロばかり先にできてたな」

「きつとそれだ」震動は新種の汚染だ。いずれこのせいで遺跡発掘現場は滅茶苦茶めちゃくちやになるだろう。彼は作業に戻った。

刃はじゅうぶん冷えていて、力を加えずとも表面に触れただけで快調に作業ははかどった。それに、奥のほうに石が柔らかかった。しばらく作業を進めると、上から埃が落ちてくるのに気づいた。またドリルを止めた。懐中電灯であたりを照らし、埃がどこから来るのかたどっていくと、天井からと知れた。

あつげにとられた。なめらかに仕上げのされた天井から、小さな間欠泉のように埃が吹き出してくる。圧縮されているか、上から圧でもかかっているかのようだ。

「アーメド？」

「うん」

「なんか変わったことはないか？」

「あつたぞ、いまジャッカルを見たんだ。もうカイロには一頭も残ってないと思ってたのに」

彼は作業を再開した。サンプル採取まであとほんの数ミリ——ドリルも順調に進んでいる——や

った！ あとはドリルを抜き、採取器具——同じく硬化工具鋼でできた、小さな鉤爪かぎづめ——を挿入すればいい。

ケースから銀色の器具を取り出し、電源用の亜鉛空気発電機にプラグを差し込み、ドリルがあげた小さな穴に挿入した。というか、挿入しようとした。揺れのせいで、針に糸を通すよりむずかしい。

「その機械工場は休みなしなのか？」

「あがつてこい、マーティン」

「どうして」

「上のこつちまで震動してる。これはおかしいぞ」

いまでは天井から石のかけらも落ちてきていた。これは異常事態だ。床にはなんの変化もないし、天井以外はどこにも傷がないのに……こんな経験はいままでにない。アーメドの言うとおり、いますぐ脱出しなくてはならない。

しかし、作業はもう少しで終わるのだ。いまでは画面も震動していたが、それを見ながら道具を操作しようとした。

「マーティン、こつちに向かつてるんだらうな」

「ちよつと待ってくれ」

「ぐずぐずするな。なにしてるんだ」

彼は答えなかった。脈動はしだいに大きくなってくる。ズーン……ズーン……ズーン……ズーン……しかし、

この小さい石のかけらがどうしても必要なのだ。

激しい衝撃があったかと思うと、天井の一部が、重さ四分の一トンはありそうな石が、すぐわきをかすめてカヴィリアの穴へ落ちていった。

「警察が来た。早く出てこいと言ってる」

「いま行く」

しかし、器具はまだ目標をとらえていない。画面を見ながら、いまは死にも狂いで操作していた。ピラミッドの全重量が頭上からのしかかってくるようで、巨大な手に押しつぶされるような気がした。

リンディ、トレヴァー、ウィニーのことを思い、器具を引き抜いた。またひとつ石材が崩落し、これはだめだと思った。あわてて機材をまとめだす。

ズン、ズン、ズン！

これは地震ではない。こんな地震はない。下に機械がある。そうとしか思えなかつた。

銃声のような音が何度か、通廊のうえから響いてくる。土埃のなか、懐中電灯の光に壁の亀裂が浮かびあがつた。

通廊へ飛び出した。身をかがめ、走ったり這いずったりして進むうち、膝も手もずたずたになる。通廊全体が、狂った巨人の持つゴムホースのようにねじれ、揺さぶられる。

いまは悲鳴をあげながら、無我夢中で上をめざした。足もとで床は崩れ、頭上からは小石が滝のように降り、思うように進めない。脈動はもう耳を聳こするばかりで、大地が激しい発作を起こして

のたくっているかのようだ。

そのとき、数本の腕が伸びてきて引っぱりあげられた。出口だ。助かった。気がつけばピラミッドの外だった。咳は出るし、分厚い埃に目はふさがっているし、足はふらつく。彼はなんとか気を鎮めようとした。

いったいなにが起きたんだ。

「マーティン、こっちだ！」

だれかに引っぱられた。埃をぬぐってなんとか目をあけ、ふり向いた。生まれて初めて見る奇妙な光景がそこには広がっていた。

見あげる巨大ピラミッドの北面に、大きな波が走っている。まるで石のブロックが液状化したかのように、奇怪な滝のようになだれ落ちてきそうに見えた。

言葉を発しようと口を動かしたが、驚きのあまり声にならなかった。ピラミッドが崩れる。

サイレンが鳴りだした。あつちからもこっちからも、しまいに四方八方から鳴りだした。遠くに、一列に並んだ観光バスが見えた。夜明けのピラミッドツアーにやって来たのが、いまは道路のまんなかでもたもたUターンしようとしている。

マーティンはアーメドと警官三人のあとに続き、発掘現場への立ち入りを防いでいる塀に向かって走った。背後で音がした。引き裂かれた大地の咆哮ほうごう、墜落するジェット機の悲鳴、百万人が生きながら火あぶりにされているかのような。

マーティンはふり返った。ピラミッドは膨れあがっていた。一個の巨大なレンガと化したかのよ

うだった。あのピラミッドの形はしだいに崩れ、何千年もそこにあった石が吹っ飛び、美しい夜明けの空へ舞いあがっていく。

カイロはもちろん、カイロをはさんでナイル川の上流でも、だれもがその音のほう、ギザの方角に目をやった。そこにあつたのは見慣れないもの、まったく正体の知れないものだった。大きな黒い柱が空に向かって突き出し、その表面には黄褐色の斑点がちらちらまたいたっている。

その斑点のひとつひとつが、一トンから三トンある石の塊だった。大型自動車ほどもあるその石が、やがては降り注ぐことになる——カイロ市にひしめく、なすすべもない数百万の人々の頭上に。

そのことを、マーティンのはつきり悟っていた。ただこのときは、テロリストがピラミッドの下で核兵器を使ったものと思っていたが。信じられないほどの運の悪さだ、ちょうどそのとき中にいたとは。悠久の歳月を耐えてきた建造物、地上で最も貴重な遺跡が終焉を迎えようとしている。

巨大な石の噴水が地上三、四キロメートルの最高点に達したとき、マーティンは壁に身を寄せて伏せた。信心深いほうではないが、深い心の平穩が訪れたのには驚いた。死が訪れたのだ。まちがない。

と思ったのもつかの間、発作的な恐怖に襲われてとっさに頭を抱え、悲鳴をあげはじめた。たえまなく膨れあがる咆哮、地の底から噴きあがるすさまじい爆発音。

ふと彼は悲鳴をあげるのをやめた。目の前にリンディの面影が浮かぶ。かつて出会った最も美しい女性、最も聡明な人間のひとり。そうだ、このまま彼女のことだけ考えながら死のう。

そのとき、トレヴァーの声が聞こえた。すぐそばにいるようにはつきりと。「パパはいつ帰って

くるの？」ウィニーがこましゃくれた口を利く。「お兄ちゃんったら、がまんが足りないのね。パはお仕事すんだら帰ってくるの」

まるで当たり前のことのように子供たちの声が聞こえる。廊下の大きな時計が鳴るのまで聞こえた。深く響く音が八回。

風を切る口笛が悲鳴に、悲鳴が耳ざわりな咆哮に変わり、石が砂漠に激突した。彼の伏せているところから十メートルほどしか離れていない。地面が跳ねあがり、衝撃で息が止まった。アーメドを見やると、ショックで目がうつろだった。歯をむき出してまっすぐこちらを見ている。

ひとつ、またひとつと落ちてきて、やがて巨大な石の雨が降りはじめた。人々の絶叫を圧して、バスや乗用車に石の当たる轟音が響きわたる。遠くからはナイル川に落ちた石の咆哮、カイロの街が爆発する音。四、五百メートル先の家並みは土煙に吞まれ、道路は粉碎され、車は道をそれて狂ったように砂漠にジグザグを描いている。猛スピードで逃げていたバスは、後部に石の直撃を受け、救済を乞うかのように前のめりになったかと思うと、爆発して炎に包まれた。耳をつんざく痛ましい絶叫。

いつまで続くのか。何時間にも思え、何日にも、ついには永遠に続いているような気がしてきた。終わりのない爆発。空からたえまなく降る石、たえまなく絶叫に重なる絶叫、関節もはずれそうなたえまない地響き。

ふと気づくとやんでいた。いま聞こえているのは静寂だ。あの地下の間で彼を押しつぶそうとした、あの静寂よりも深い静寂。ひとつには左耳の鼓膜がおかしくなったせいもある。それに右耳は、

このあと数日は悩まされそうなどい耳鳴りがしていた。もうひとつにはシヨックのせいもあった。さつきまでアーメドがいた場所、彼の顔からほんの一、二メートルのところ崖のようなのが現れていたのだ。そのときには警官がひとり大の字になっていた。見えない目で空をにらんでいる。シヨック死していた。ひとりのドイツ人観光客が、ふらふらさまよいながら叫んでいた。「モルゲン・ハット・ゲブロッツヒエン、モルゲン・ハット・ゲブロッツヒエン」  
モルゲン・ハット・ゲブロッツヒエン  
 夜が明けた。東から雷光が走るように、太陽の光が射し込んできた。名高いギザ台地——いまは煙に包まれ、瓦礫がれきに埋もれたギザ台地の向こうから。

マーティンは立ちあがった。彼はピラミッドのすぐそばのメナハウス・ホテルに滞在していた。そこへ向かって歩きはじめる。足がふらついていたが、気にならなかった。この大地は廢墟と化し、そこを行くほかの亡霊たちもみな彼と似たようなものだった。

台地と対照的に、メナハウスの庭園はいまも緑にあふれていた。ゴルフコースには五、六個も巨大な石がめり込んでいたが、ずっと前からそこにあったように見えた。

ホテルの建物も無傷だった。従業員も宿泊客も外に出て、空に噴きあがる大きな黒い柱を見あげていた。この時期の季節風に吹かれて、その柱がゆっくりと南へ流れてゆく。英国とエジプトの王室旗が、ホテルと同じく無傷のまま、堂々と風にひるがえっていた。

十一月のエジプトは日によってはそれは美しく、カイロでさえ空気の澄みわたる日があるほどだ。マーティンは上階のロビーを突っ切り、レストラン（ハーン・エル・ハリリー）に入った。ウェイターがひとり、窓ぎわに立っていた。「コーヒーを頼むよ」マーティンは言った。ウェイターは

身じろぎもしない。だが、やがてふり向いた。顔が涙で汚れている。マーティンは自分も泣いているのに気づいた。ふたりは抱きあい、大のおとなが子供のよう泣きじゃくった。「友だちを亡くしたんだ」マーティンは言った。

「わたしはエジプトをなくしたんです。胸がつぶれそうです」

その日の午後、マーティンはホテルの屋上にのぼった。みんなが言っているそれを自分の目で確かめるためだ。みんなと言っても、消火活動をしている者や、破壊された街の後片付けをしている人、街を粉砕した巨大な石をぼうせんと眺めている人は別だが。

目の前に台地がそびえている。だが、ピラミッドがあったところにあるのはピラミッドではなく、巨大な黒いレンズだ。午後の陽射しが、埃のせいでやわらげられている。

ホテルとピラミッド群を隔てる空間を眺めた。そこかしこで人々が動きまわっている。ほとんどは、緑の制服のエジプト警察とカーキ色の軍服の英国軍兵士たちだ。メナハウスの前の道路にびかびかのロールスロイスが駐まっており、巨大な石のあいだを総督が将校の大群を引き連れて歩いている。

マーティンは長いことレンズを見つめていた。見たところ真円の凸レンズで、中心部の高さは六メートルぐらいか。過去の記憶をざっとたどり、頭のなかの百科事典に関連項目がないか探した。

見つからなかった。過去にこれに類するものに出くわしたことはない。しかし、これが大ピラミッドの真上に現れたのは偶然とは思えない。偶然であるはずがない。

とすれば、ピラミッドが建造されたのはこれの出現を阻止するためか、それとも隠すためだった

のだろうか。

それはそれで謎だが、それより大きな謎がある。そもそも、これはなんのためにあるのかということだ。明らかに高度な技術の生み出したものだが、同時にきわめて古いものだ。ギザ台地を掘り返そうなどという者は何千年も前からいなかったし、だいたいこんな大きなものが、ピラミッド建造後に埋められたということはありえない。

これは古いものだ。そうでなければおかしい。しかし、あれを建造するとすれば、たんに構造的という以上の問題がからんでくるだろう。また、あれだけの量の石材を空高く吹き飛ばすのには、とほうもないエネルギーが必要だったはずだ。ところがこの長い年月、ピラミッド群の地下にはトンネルや立坑が掘られ、音波探知機やレーダーでさんざん調査されてきたというのに、こんなレンズや爆発物など片鱗へんりんも見つからなかった。

というより、ほとんどなにも見つかったことがないのだ。一九五〇年代、大ピラミッドの南面の船の間から、いわゆる「太陽の船」が二隻発掘されたが、ほかにはなにも見つかっていない。洞窟のような影がいくつか認められたが、それだけだった。

しかし、それにしてもこれは！ 日の光にざらざら輝いている。なんとこの禍々まがまがしさだろう。

そこらじゅうでサイレンがむせび泣いている。大英帝国はもうがたのきた死に体だと思っていたが、カイロ消防署にはじゅうぶんな車両がそろっていらしい。だが、病院のほうはどうだろうか。完全な植民地と同じく、保護領にも国民保険制度は行き渡っているのだろうか。よくは知らないが、もしそうでないとしたら、ここの病院はあまり整備されていないだろう。大けがをしなかったのは

まったく運がよかった。

気がつけば耳鳴りも収まっていた。

彼は目をそむけた。そのうつろな暗い眼をこれ以上見ていたくなかった（あるいは見ていられなかった）から。あの驚異の遺跡はこれのせいで消えてしまったのだ。長い歳月をかけて建造された永遠のピラミッドが。

それが破壊されるのに、五分とかからなかった。

下へおりようとしかけて、ふとためらった。これはなにかの悪夢だ。きっとまだ目が覚めていないのだ。

だが、それははかない望みだった。

ふり返ってみた。やはりそこにある。レンズとしか呼びようがないもの。巨大な黒い眼がぎらぎらと空を見あげている。このレンズが、みずからピラミッドをあの空にはじき飛ばしたのだ。

古いものにまちがないが、まるでできたばかりのように傷ひとつなく見える。地の底からせりあがってきた悪魔の眼。悠久ゆうきゅうの歳月を眠りつづけたあとに見開かれたかのような。

その印象はあながちまちがいではなかった。

第一章

十一月二十二日 暗闇のダンス

アルフレッド（アル）・ウィリアム・ノース將軍は、上官の執務室である国防総省ペンタゴンの豪華な続き部屋へ入った。昨年、サムスン將軍は統合參謀本部議長に任命され、アルはそのサムスンの引きで、軍最高幹部の政治的駆け引きという雲の上の世界へ足を踏み入れたのだ。

当番兵の姿はなく、來訪を取り次いでくれる者がいなかった。現在の軍の混乱ぶりを考えれば驚くほどのことではない。たぶん、ほかの用を言いつかってこの広いビルのどこかにいるのだろう。その間の代替要員が見つからなかったわけだ。

十分後にはホワイトハウスに到着していなければならない。というわけで、アルは形式張ったことは省略し、ドアを一回ノックして執務室へ入った。アルがトム・サムスンと知りあったのは、トムが空軍參謀長に昇進したときだ。すこぶる有能な將校で、おまけに好感の持てる男だった。

しかし、それは自分より目上の相手に対するときだけだった。いまでは向こうは総合參謀本部議長、アルは副議長だ。以前とは状況がちがうのだ。トムは冷淡でそっけなく、人を容赦なく叱り飛ばし、失敗には不寛容、おまけに要求はとんでもなく厳しかった。優秀な軍人という評価に変わりはないものの、柔軟さに欠けると思うことも少なくなかった。正直言って、あの椅子には本来自分が座るはずだった、とアルは思っていた。というより、そうなるものと思込んでいた。それがふ

たをあけてみれば、待っていたのは深い屈辱であり、華々しい栄達の悲しい終止符だった。大統領とは古いつきあいだったし、率直な話、なぜ自分でなくトムが選ばれたのか理解できなかった。これまで任務はみごとにこなしてきたのに。

ふたりのちがいで言えば、トムが戦闘機パイロットだったのに対して、アルは戦闘機の訓練は受けたものの、ずっと参謀将校で通してきたということだ。トムは名誉負傷章パイプルハートと航空勲章を授与されている。アル自身は、怒りを込めて発砲された銃声を聞いたことすらない。キューバ危機のさいに実戦に参加したトムを、アルは心のどこかでねたましく思っていただろうか。

ずばり答えれば、もちろん思っていた。あれが自分だったら、あとひと息のところまで頂点に手が届かない——そんなことにはならなかっただろうに。

「トム、迎えに来ましたよ」遠慮がちに言った。

返事がない。

バスルームのドアが少しあいていたので、アルはそちらへ向かった。「トム？」

なかから、なにかごそごそ音がする。

「だれが入っていいと言った？」トムの声でした。いつもの不機嫌なうなり声だ。

「いやその、外にレニーがいなくて——」

「いま取り込み中だ！」

「失礼！」

ドアに向かおうとして、トムのデスクにふたのあいた銀色の箱がのっているのに気づいた。古め

かしいシガレットケースほどの大きさで、なかには細い金のシリンダーが六本並んでいた。その横に銀色の注射器が一本。注射器は、ソケット（おそらくシリンダーをこれにはめ込むだろう）のついた太い後端からなめらかにすばまって、継ぎ目もなく先端の針につながっていた。その針は髪の毛のように細い。

急いで外へ出ながら、頭のなかは忙しく回転していた。あの道具——トムは麻薬かなかの依存症なのだろうか。それとも癌にでもかかっているのか。それにしても、あんな変わった道具は見たこともない。

次の瞬間、トムが内側のオフィスのドアを力任せに閉じた。部屋全体が揺れるほどの激しさだった。

だが、アルはろくに気がつきもしなかった。トムが薬物依存症なら、しめたというのが正直な気持ちだ。知っておいて損はない。

そのとき、レニーが戻ってきた。

「將軍、いまお取り次ぎします」

「もうご存じだ」

レニーは青ざめた。「ほんとですか？」

アルはうなずいた。それ以上なにを言うまもなく、トムが大またに部屋から出てきた。りゅうとした軍服姿、灰色の目はまっすぐ前に向けられ、顔にはなんの表情も見えない。

レニーが気をつけの姿勢をとった。

そのデスクの前を通るとき、「あとで話がある」とトムは怒鳴った。

「はいっ！」

「なんの話かわかつてるな」と言い捨てて、廊下に向かつてずんずん歩いていく。

アルはあとに続いた。ともに専用エレベーターに乗り、地下駐車場においていく。将官専用車が後部座席のドアをあけて待機していた。この間、ふたりはまったく無言だった。じつを言えば、トムが先に口を開かないかぎり、だれも話しかける者はいないのだ。世間話とか、ジョーク、ゴシップのたぐいに彼は応じなかった。軍人の職務のうちで最も政治のないまの職を、よくもこれでこなしているものだ。そこがなにより不思議なところだった。どうしてそんなことができるものか、参謀本部の將軍たちはひとり残らず知りたがっていた——弱みを握るとつかかりにでもならないかというわけだ。

だいたい統合参謀本部というところは、結束が固くて運営も楽な組織と相場が決まっている。だが、トムの下ではそうではなかった。いまこは、蜘蛛の巣だらけのネズミの巣穴も同然だった。長年ともに働いてきた男たちが争いあうさまは、まさに罫にかかったけものさながらだ。

トムが就任して一年で、すでに五人が「辞任」した。その五人が五人ともじつは解任——それも無慈悲で底意地の悪い、しばしば不可解な解任だった。なお悪いことに、その後は全員が報復のように屈辱的な職に左遷されていった。陸軍参謀総長だったハーフ將軍は、いまミシシッピ州のシルカー駐屯地の司令官として退役を迎えようとしている。シルカー駐屯地は撤廃が決まっっていて、したがってハーフのおもな仕事は、環境浄化と資産売却の手はずを整えることだった。

アルは車に乗り込んだ。重要な会議が待っているのはわかっていたが、会議の内容はよく知らない。トムは知っているのだからが、教える気はなさそうだ。まさか、アルがやりだまにあがるのでは。まさか大統領の前で不意打ちを食らうのでは。だとしたら、それは確実に転落への前奏曲だ。

ただ、アルにはひとつ強みがある。大統領のジェームズ・ハンナ・ウエイドとは、士官学校の寮で同室になって以来の仲なのだ。ここ数年はどうしても距離を置いたつきあいしかできなかったが、それでも親しいことに変わりはない。アルはいまでも、ジミーのスカッシュの相手として招よばれることがあるほどだ。たいていは、それでなくても険しい大統領の道が、とくにつらい局面にさしかかったときだった。しかし、このところ大統領は順調にやっていたから、旧友とのスカッシュもさたやみになっていた。それにどちらも承知しているとおり、その旧友はいま裏切られた友になっている。

車は十四番通りに入り、〈マクドナルド〉の見慣れた緑色のアーチの前を過ぎ、ホワイトハウスの敷地内に入った。

「今日は、情報部の報告を聞くことになっている」トムが口を開いた。  
「というと、どういう方面の情報ですか」

トムはいったんこちらに顔を向けたが、また前に向きなあった。すぐに車は停まり、ふたりはホワイトハウスのなかを抜けて閣議室へ向かった――が、閣議室も大統領執オ務室も素通りし、大統領副首席補佐官モリッシーのオフィスを抜けて、大統領の書斎に入った。

大きな会議には向かない部屋だが、そもそも大きな会議が始まるわけではなかった。

「やあ、アル」大統領が言った。トムがはつと身を固くするのがわかった。いい兆候だ。大統領もやつと、この任命はまちがっていたと気がついたのかもしれない——アルが言ったとおりだと。これは、彼が大統領に対して口にした唯一の政治的見解と言つてよかつた。大統領はトムに目を向け、「おはよう、将軍」

「おはようございます、大統領閣下」

ほどなく、国家情報局長ポー・ウォルドーが補佐官二名を従えて入つてきた。補佐官はそのまま進んでテレビのそばに陣取つた。

ウォルドーが言った。「昨日カイロで大爆発があり、少なくとも十万人が死亡し、物的被害もとほうもない規模に及んでいます。爆発でクフ王のピラミッドは破壊されました」

「それで？」トムが噛みつくように言った。

大統領が鋭い視線をそちらに投げる。

しかし、トムが苛立つのもわかる。カイロの大惨事のこととは世界中のあらゆる局が報道している。テレビでもラジオでもインターネットでも、ともかくそれ以外の話題はないと言つてもいいほどだ。アルは思った——たぶん例のテロリスト集団のしわざだとわかつたのだな。大英帝国が攻撃を開始すると言つてきたというのだろう。まちがいなくなにかしら支援を求められているのだろうが、こういうことには例によって例の問題がつきものだ——ある帝国の望みを、別の帝国の怒りを買わずにかなえるにはうどうすればよいのか。

ウォルドーが咳払いをした。「大統領閣下、この三十分間には新しいのは出てきておりません」

彼は言った。

アルは必死で頭をひねった。新しいの？ いったいなんの話だ。

「いまいくつになってる？」

「さつきアンコールワットに現れたのを含めると、十四になります」

なんの話をしているのか訊いてみたかったが、訊けばどうしても無知をさらすことになる。あの険しい目つきからして、トムもどうやら同じことを考えているらしい。統合参謀本部議長の指揮下には、軍の情報部が五つもある。そのうえにフィリピン植民地局もあればキューバ情報部隊も抱えているのに、どうして軍内部から情報があがってきていないのか。トムは責任を追及するだろうが、今度ばかりはアルにもまったく異存はなかった。これは赦しがたい怠慢だ。

大統領が言った。「それで、それはみんな——同じなのかね。距離とか、そういうことは」

「北極点から一千七百七十キロの地点を中心として、いずれもちょうど一万キロの位置にあります。また、出現場所が古代遺跡のまんなかという点も同じです。プリア・ヴィヘアに現れたものについてインドシナ文明研究所が調査を開始しておりますが、これまでの調査によると、硬度は少なくとも三〇〇〇はくだらないそうです。カイロのものと同様です。どう考えても材質は同じでしょう。この地上で最も硬い、それも桁ちがいに硬い物質です。水爆でも使わなにかぎり、傷ひとつつけられないでしょう」

「わが国は水爆を保有しているのかね」

「保有しております」トムが言った。「英国空軍の強制査察に引つかからないようにじゅうぶん用

心しておりますが、保有はしております」

五帝国間で結ばれた非核協定を遵守させようと大英帝国は躍起になっているが、その五帝国中アメリカは最小国で、したがって軍事力も最も小さい。というわけで、くだらない協定を現実には守られていないのはアメリカだけだ。フランスが守っているわけがないし、ロシア皇帝や秘密主義の日本国天皇にいたっては、隠れてなにをやっているか知れたものではない。中国の土豪でさえ、核爆弾ぐらい持っていてもおかしくない。

大統領は窓ぎわに歩いていった。「このワシントンにも出てきはしないかと心配しているのだ。その可能性はあるかな」

ウォルドーは答えた。「次の段階が始まるのならべつですが、あれの出現は終わったように見えます。しかし、言うまでもなく、奇妙なのは——どれもみな、古代の聖地だというのが」

「古代人は知っていたのだな」大統領は言うのと、ふいにふり向き、初めてひとりひとりに目を合わせていった。

その目に懇願の色が見えるとアルは思った。その背後にアメリカの全国民が控えていて、教えてくれと大統領を通じて訴えているようだ。

「レンズは……」アルは口を開いた。トムが射抜くような視線を投げてきたが、かまわず続けた。「レンズは光を反射したり屈折させたりするものです。あのレンズはどちらの役目を果たすことになっているのか、なにかわかつているんでしょうか」

ウォルドーは首をふった。「いまのところは、とくになんの役割を果たしているわけでもなさそ

うです。英国諜報部<sup>1</sup>第三部<sup>3</sup>によれば、カイロのレンズは既知のエネルギーを発していないし、また吸収もしていないらしい。カンボジアのも同様だと研究所は言っています」

「では、自然のものかどうかわからないのか」

「大統領閣下、われわれは自然のものとは考えておりません」ウォルドーが答えた。

「しかし、それは重大な問題ですよ」アルは言った。「人工のものだとすれば、だれがなんのために作ったのか」

「重大どころか、一刻を争う問題だ」ウエイド大統領はびしやりと叫び出した。「こんな緊急課題は歴史始まって以来だろう」ひとりひとりの顔を見ていく。「トム、きみは落ち着いているな」

「まだなにもわかっていない段階で、そのような評価はいささか早計ではありませんか」  
大統領は表情を固くして、「直感というものがあるだろうが！」

「お見せしたいものがあります」ウォルドーが急いで口をはさんだ。「映像を出してくれ」

テレビ画面がちらつき、映像が映し出された。それなりに美しい田園風景のなかを人々が歩いていく。だが、その格好がみょうだった。寝間着姿の者もいれば、下着姿の者、コートを着ている者がひとりふたりはいたが、全裸の者もひとりいる。男も女も、子供もいる。

その集団のあとに続くのは、緑と白の格子柄のパトカーだ。青い回転灯をひらめかせている。「これはなんだ？」ウエイド大統領が尋ねた。

「グロスターシャーです」とウォルドー。

「いつ撮ったものだね」

「生中継です」ウォルドーが答えた。「昨夜、この人々は明るい光を浴びたのです。円盤型の物体が頭上に現れて光を発したそうです。それからずつと真北に向かって歩きつづけているのです。

十一時間で二十二、三キロほど」

「その物体とやらは、もう何年も前から目撃されてきた円盤と関係があるのかね。N A S Aが知的生命体に操縦されていると発表したU F Oと……」

「わかりません。ほとんどなにもわかっておらんのです」

「要するに、この人間たちを止められないと言いたいのだろうか。ちがうかね」トムがあざけるように尋ねた。

「たしかに止められんよ、サムスン將軍」ウォルドーがやり返す。「止めるには薬を投与するしかない。地元の病院でひとりを検査したが、身体的には異常はなかった。ただ、脳のスキャンで見つかっている。通常の三分の一しか機能していない」

「ではなにか失っているわけだな」トムは言った。「知能はどうだ」

「さあ」ウォルドーが答えた。

「襲われたときの映像はあるのかね」大統領が訊いた。

「目撃者によれば、円盤は鈍いオレンジ色に光っていたそうです」

アルはふと思いついて、「グロスターシャーから一番近いレンズはどこですか」

「それとこれとなんの関係がある？」トムが訊いた。「よかったらお聞かせ願いたいね」

「いや、鋭い質問だ」とウォルドー。「その答えですが、一番近いのはアルジェリアのタツシリ砂

漠のレンズです。もうひとつ付け加えたいのが、その外人部隊の報告によれば、レンズからオレンジ色の火の玉が吹き出したということです。ただ、それはグロスターシャーが襲われるわずか四分前のことで——」

「それは関係がありますね」アルは言ったとたん後悔した。先走りのしすぎだ。

「將軍、よくわからんのだが——」トムが言いかけた。

大統領がそれをさえぎって、「わたしもそう思う。グロスターシャーを襲ったものがアルジェリアのレンズから出てきたのか、われわれには知りようがない。しかし、なんらかの関係があるのはまちがいないと思う。この五十年間に何度も目撃された円盤、この人たちを襲った物体、それにこのレンズ。付け加えるなら、いまは最悪の事態を想定しておくべきだと思う」

「いずれも英国とフランスの問題ではありませんか」サムスンが言った。「大日本帝国にも出現しているのなら別ですが。出現しているんですか」

「いえ、いまのところ、大英帝国とフランス帝国の領土内、それと南米の一部の国だけです」

「でしたら、ここは様子を見るべきだと思います」トムはまるで説教師のように響く声で言った。「おそらく秘密兵器のたぐいでしようが、わが国には無関係です。ロシア皇帝はなにか隠し持っていると言われてましたし、アフリカの領有権を欲しがっています。実際、エジプトを手に入れられれば喜ぶでしょう。少なくともトルコにいやがらせはできる」

大統領はサムスンに目を向けた。「トム、きみの役目はなんだ。なんのためにここにいると思っ  
ているんだ。これは異常事態だ。とんでもない異常事態だ」テレビ画面を身ぶりで示し、「これは

確実に広がるぞ」

トムは引き下がらなかつた。「そんな証拠はどこにもありません」

「ぜったいに広がる！」

「アメリカ合衆国は攻撃されておりません。攻撃が迫っているという証拠もありません」

「トム」大統領は言った。「ペンタゴンに戻りしだい、ただちに最高防衛準備態勢<sup>D E F C O N</sup>を発令し、世界中の軍司令部に戦争警戒警報を出せ」

「閣下、それは——」

「われわれは攻撃を受けているのだ、わからないのか」大統領は言った。「青と白と赤の三色旗がだ！どこかの帝国や南米の小王国の話じゃない。われわれが攻撃されているんだ！」

トムは身体をこわばらせた。激しい怒りに、その目は文字どおりぎらぎら光っていた。

しかし、大統領の話はまだ終わっていないかつた。「諸君、わたしは軍の出身だからわかる。敵はいま、こちらの防衛態勢に探りを入れているのだ。あの小さな町——この地球上で最強の帝国のどまんなかの、あの小さな町で起きたのはそれだ。ウォルドー、英国、フランスをはじめ、全帝国とこの件では連絡をとりあつてくれ。ほかにも似たようなことが起きていないか、CIAに言つて世界中の町という町を監視させねばならん」

アルは、室内に恐怖のにおいが立ち込めるのを感じた。ウェイド大統領がパニックに駆られ、性急に行動を起こしているのではないかとよいが。

「アル、きみには特別対策本部を組織してもらおう。あのレンズを残らず破壊する方策を見つけたく

れ。早急に頼む。確実に破壊できる方法を」

「閣下」トムが口をはさんだ。「レンズを攻撃するのはいかがなものでしょうか。まだなにもわかっていないのですよ」

「勲章持ちの男が退却を言うか」大統領は言った。「ああ、きみの意見はわかった。アル、攻撃準備ができたらずく知らせてくれ。直接にな」電話を指さし、「直接にだぞ」と念を押す。

「承知しました。しかし、わが軍に核爆弾は四発しかありません。英国とフランスの協力がが必要です」大統領はため息をついた。「ウォルドー、わが国に核爆弾はいくつある？」

「二十三発です。軍に四発、残りは地下の——」

「トム、アル、わかっているな。これはきみたちの知らないことだ」

「閣下、お言葉ですが」トムは言った。首は朱に染まり、血管が脈打っている。「われわれに知らされていなかったのは納得できません。戦略計画でも、シミュレーションでも、当然知っておかなくては——」

「それでわたしは、怒り狂った帝国大使四人に囲まれて、核を引き渡せと要求を突きつけられるというわけか。リークしたければするがいい。トム、きみは部下全員から嫌われている。機密保持のために悪いことではないがな」

アルはなに食わぬ顔を装った。痛快さに口もとがゆるみそうになるが、ちらとでも笑みを見せようものなら、日が沈む前に**餓首**だろう。

ウォルドーの補佐官のひとり**が**、イヤーパーズからの声に耳を傾けていたが、やがて情報局長に

向かつてうなずきかけた。

ウォルドーは言った。「大統領閣下、役に立ちそうな人物がいます。ピラミッドが爆発する直前、そのなかに考古学者がひとり入っていたのです。いっしょに仕事をしていた同僚は死亡しましたが、その学者は助かりました。いま来ています」

「お手柄だ、ウォルドー」大統領は言った。「トム、見習うんだな。ウォルドーは大統領にいいところを見せようとがんばっている。部下の鑑だ。きみも少しは考えたほうがいい」

トムは気色ばんだが、それを糊塗するようにこわばった笑みを浮かべる。そのとき、薄汚れた若い男が目を丸くして部屋に入ってきた。なかなかの男前だが、疲れきった顔をしている。

マーティンは機内で卵料理を食べ、コーヒーを何杯も飲んだ。にわかには信じがたいことだった——空軍の特別ジェット機に乗せられ、はるばるカイロからル・ブルジェ空港に飛び、その次はここだ。リンディと子供たちとは、機内からテレビ電話で話すことができた。ふだんならさぞかし愉快だっただろうが、いまはそれどころではない。あんなことが起きるとは、いまだに現実のこととは思えない。大ピラミッドが消え、そのあとに、あの……あれが。いまではレンズと呼ばれている。彼自身もそう呼んだ。カイロを発つ少し前、BBCにインタビューされたときのことだ。ひよっとしたら、最初にレンズという単語を使ったのは彼だったのかもしれない。

そしていま、ここはホワイトハウスだ。それもほかならぬ西棟だ。いまの自分はたぶん汗くさいだろうと思う。着替えだのシャワーだの、そんなことに気を使ってくれる人はいなかったのだ。そ

れどころか、髪の毛はいまもギザの土埃をかぶったままだ。

黒いスーツの男に本の並ぶ書齋へ連れていかれた。大統領執務室が見られるかと期待していたのだが、ここは明らかにアメリカの至聖所、アメリカの偉大な英雄ならぬ偉大な愚者、ジミー・ウェイド大統領の私室ではないか。彼は国立科学アカデミーの予算をごっそり減らしたうえに、何十という大学（ユーライアも含めて）への補助金をあっさり引きあげた。アメリカの貿易連合には何十億でもぼんと出し、強大な帝国経済圏とのいつ果てるとも知れない戦争を支援してやるのに、教育政策はあつてないようなものだし、助成金給付制度はでたらめだし、科学への関心はゼロというよりマイナスのようだ。

ウェイドのもとでは、NASAの宇宙生物学や地球外文明探査の諸計画さえないがしろにされている。UFOが知的生命体のもとと判明したのだから、このふたつはいま世界で最も重要な研究分野のはずなのに。もちろん、高度推進技術研究会議はべつとして。

とはいえ、大統領は大統領だ。アメリカ国民の指導者であり、世界でもとくに影響力のある指導者のひとりであることに変わりはない。その人物がいま目の前にいる。どう見てもふつうの、切れ血の出る人間だ。不思議な気分で見ていると、立ちあがり、手を差し出してきた。マーティンはその手を握り、この本職の政治家の奇妙にうつろな目をのぞき込んだ。

はげあがった頭の大柄な男——美々しい軍服姿の将軍がふたりもいるのに、こちらのほうがずっと存在感があった——が、マーティンの手を力強く握り、椅子に案内してくれた。「さぞかしシヨックだったでしょう」彼は静かに言った。その手は柔らかく、目は大統領とちがって恐怖に見開か

れてはいなかった。知性に輝き、ちゃんともものを見ている目だ。ポー・ウォルドーなのはもちろんわかっていた。いつもニュースで見る顔だ。

「ドクター・ウインターズは——マーティと呼んでもよろしいかな」

「マーティンです」

「失礼。このマーティンは、わが国の考古学会でも傑出した人物で、たったひとりでちょっとした革命を起こしているのです」

「ちょっとした」じゃない、どでかいだ、と言いたいところだったが、マーティンは黙っていた。

「よく生きて帰れましたね」大統領が言った。「どこにおられたのかな。わたしも入ったことがあるのだが、あのなかは簡単に動きまわれるところではないでしょう」

「地下三十メートルの玄室のなかにいました」

「そんなところにおいて、どうやって逃げられたんです？」將軍のひとりが口を開いた。細面の、酷薄と言いたいような顔。陰險な小さい目が黒曜石のように黒く光っていた。

マーティンは聞こえなかったふりをした。無礼なうえに、はつきり言っばかばかしい質問だ。

「サムスン將軍がおっしゃりたいのは——」

「アル、よけいな口出しはせんでいい！」

もうひとりの將軍はすぐに口をつぐんだ。どうやら、背が高く豊かな白髪をした、この將軍のほうが地位が低いらしい。こちらのほうがいい顔をしている。鷺鼻わしばなで品格があつて——悲哀のただよう顔だとマーティンは思った。

「地下深くにいたから助かったんです。吹っ飛ぶ三分ほど前に異常な脈動を感じたので、引きあげ  
る時間がありました」

「ドクター・ウインターズ、じつはまったく同じレンズが世界十四か所に出現しているのです。そ  
れも、北極点近くの一点を中心に、いずれもまったく等距離に——」

部屋が遠くなる。声が記憶のかなたから聞こえてくるようだ。

「ドクター・ウインターズ？」

彼は頭をはつきりさせようとした。最初に目に入ったのは、小さな光る目をした將軍だった。凶  
暴な囚人を見張る看守のような目つき。マーティンはつばを呑み、室内を見まわしたが水は見当た  
らなかった。「なるほど」彼は言った。「どういふことだかわかると思います。それは聖なる環セイクリッド・サークルです。

オリヤンタイタンボ、イースター島、アンコールワットをつなぐと——その、こういう遺跡がみん  
な破壊されたとおっしゃるんですか」

「そうです」大統領は言った。「いま知りたいのはこういうことです——このレンズは、わたしは  
当然そう思っているのだが、危険なものなのか。そしてもし危険だとすれば、なにか対策にお心当  
たりはないだろうか」

マスコミはウエイドをあほう扱いしているが、これは鋭い質問だ。「閣下、一万五千年前、地球  
上には高度に発達した文明が栄えていましたが、大災厄のためにとつぜん滅んでしまいました。ピ  
ラミッドは別として、先ほど言われた遺跡はみな、地球の大円上の点にのちに建造されたものです。  
その理由はまだわかっていませんが」

毒液を吐くヘビのように、サムスン将軍が吐き捨てた。「それはただの憶測でしょう」

「サムスン将軍」大統領が切り返す。「きみは、任務遂行に役立つ情報を集めるためにここに来ているんだろ。黙って聞きたまえ」

「この男の研究には異論が多いのですよ」サムスンがびしやりと言った。

「いえ、そんなことはありません」マーティンは言った。

「ふん、わたしも人並みに科学雑誌は読んでいる。きみの研究に異論が多いのはまちがいないだろう！」

怒鳴りちらす将軍というものにもどう対処してよいかわからなかったが、腹が立ったのはたしかだった。いくらなんでも無礼すぎる。

大統領が尋ねた。「ドクター・ウインタース、このレンズはなんだと思うか、意見を聞かせてもらえませんか」

「厳密に考古学的観点から言えば、わかりません。しかし、古い記録を読むと、このようなレンズは破壊の装置だったのではないかと思います」

「なんの破壊です」

「文明のです。一日でついえたんですからね。ものの数分で。具体的には六月のある日の午後、五分か、おそらくもっと短かったかも」

これを聞いて、うるさい将軍も黙り込んだ。

「今回それが起こる可能性は？」

マーティンはようやく、ここでの自分の役割に気がついた。「じつを言うと、わたしはその、いささか混乱してまして。わたしは——つまりその、シヨックでしたし、急にこんな……」

「質問のしかたが悪かったようだ」大統領が言った。「今回、そういうことが起こる危険があると思いますか。もしあるとすれば、そう思われる根拠を知りたい。これで少しは答えやすくなりますか」

「ある暦——つまり、マヤの暦によると、いまの時代は今年の十二月二十一日に終わることになっています。その日は冬至に当たるんですが、それと同時に、地球の軌道と、銀河赤道と、太陽の黄道の三つが交わるんです。つまり、ごくごくまれな合あはれが起きるんです」

「まったくのたわごとではないか」サムスンが言った。「古代のマヤ族が銀河系のことを知っていたとしてもいいのか。血に飢えた首狩り族だぞ。考えるの**も**ばかばかしい」

マーティンは心底この男が嫌いになった。これほど強烈な感情を抱くのは彼にしてはめずらしい。強烈な感情ということなら、妻や子供たちへの愛情だけにしておきたい。憎悪におぼれたことはない。しかし、このサムスン將軍は特別だった。「日付は合っています」マーティンは言った。「マヤ人がなにを知っているようにいまいと、地球がその位置にあるというの**も**まちがいないんです」

大統領が言った。「それはつまり、人類の文明がまるごと、たった一日で滅びたということですか。ドクター、それはいまのわれわれにとつて、どういう意味があると思います?」

補佐官がやっと水を出してきたので、マーティンはそれを一気に飲み干した。「砂漠の砂が、まだのどに引つかかかってまして」

「なるほど」丁重なほうの将軍が言った。「どうぞ好きなように話してください」

「ええ——この予言、この二〇一二年の話ですが、年月日があまり具体的なので昔から不可解とされてきたんです。たいへん高度な計算能力が必要だったはずなんです、マヤの長期暦のことですが。しかも、銀河系に対する地球の位置についても知っていたと思われるふしが——お気にさわったら申し訳ないんですが——」

「それについては、まだ宇宙物理学者のあいだで議論されているはずだ」サムスンが言った。

「トム、ちょっと黙っててくれないか」

「わたしはじゃまをしているつもりはありません」

「ドクター・ウインターズ、続けてください」大統領が言った。

マーティンはつばを呑んだ。のどがまたからからになっていた。こんな張りつめた空気には慣れていない。だれの目にも恐怖があり、汗のにおいが鼻をつく。「はい。地面からああいうものが出現するのを見ていると、思い出すことがあります——多くの古代文明では、ゼイトウエイ《通路》を抜けてくるもの

ののことを語っているんです」

「NASAの言うエイリアンですか」

「いえ、他の惑星から来たという意味でのエイリアンではなく。距離を考えると、UFOは並行宇宙からの投影物のようなものではないかという説のほうがいまでは有力視されています。つまり、わたしたちのいまいる場所から、たったいま投影されているということですよ」

「じつにくだらん。大統領閣下、こんなたわごとは聞いてもむだです」サムスンが言った。

大統領が怒りを爆発させた。「將軍、頼むから黙っていてくれないか」

サムスはおとなしく引つ込む気はなかった。「この男はさがらせるべきです。じゃまになるだけ——」

「黙って話を聞くんた。トム、何度も言わせるな！」大統領は怒鳴りつけた。

サムスは口をつぐんだ。

「ドクター、先を続けてください」ポー・ウォルドーが静かに言った。

「ええと、つまり、その——シユメールではアヌンナキと呼び、バビロニアではアプカルル、ヘブライではネフィリムと呼んだんですが、ともかくあげだせばきりがありません。いずれも強大な支配的民族で、見かけは人間に似ているんですが、目は爬虫類のようで、別の世界から来るということです。人間の敵として現れる場合もあれば、慈悲深い者としてやって来ることもあります。まるで敵対するふたつの党派があつて、人類に対して別々の目的を持つているかのようです。あるときかれらはお互いに戦つて、いまではもうこちらの世界にはいなくなつたと言われています」

「それがいまの状況と関係があるというんですか」

「ひよつとしたら、マヤの古い暦が終末の年月日を正確に予言しているのは、宇宙物理学的条件と関係があるんじゃないかと思うんです。つまり、その宇宙物理学的な条件によつて〈通路〉が開くのではないかと。レンズはそのためにあるんじゃないでしょうか。もしそうなら、あれは人の想像も及ばないほど恐ろしいものだと考えられます」

沈黙が落ちた。

そうは言わなかったものの、その言葉を口から発しながら、マーティンはそれが正しいのを感じていた。いったん口をつぐんだが、思い切って言ってみた。「あの、したがって、もう機械のスイッチが入っているんだと思います。これからどんどん活動が活発になって、十二月二十一日が来たら人類の文明を破壊する——というか、破壊しようとするんじゃないでしょうか」

大統領は立ちあがり、窓ぎわに歩いていった。「ウォールドー、どう思う」

「そのような情報はまったくありませんが」

「トムはどうだ」

「これは——もちろん幻覚とは言えません、たしかにあるんですから。しかし、もう少し様子を見たほうが良いと思います。戦うにしても、なにと、どうやって戦うのかわからなければ話になりません」

「アル、さっきの命令を変更する。あのレンズのうち、最も辺鄙な場所にあるものに核攻撃を加え

——

トム・サムスンが飛びあがった。「とんでもない！」

「トム、これは命令だ」

「そのように危険で性急な方針でおられるのでは、ご命令といえど従うわけにはいきません！」

「アル、やってくるな？」

「わたしは地位がひとつ下です」

「きみたちに言っておきたいことがある。わたしは聞くべき返事を聞かされていない。たんに辞任

を求めるつもりはない。一分以内に命令に従わなければ断固逮捕する。この場だ。大統領にはシークレットサービスというものがあるんだ」と、トムをまっすぐねめつけた。マーティンは、あんな立場には立たされたたくないものだとしみじみ思った。

アルが立ちあがった。「ただちに攻撃準備に入ります」

「きみはどうだ、誓いを守る気はあるのか、トム」

「もとより破ったつもりはありません」

「わたしは法に則った命令を忠実に実行し……の部分についてはどうだ」

「警戒警報と戦争警報は発令します。ですが、そのほかの件については、まず国家安全保障評議会と国防相にはかるべきです。国防相に知らせないのはよくありません。それから、ぜひとも英国とフランス——全帝国に連絡なさるべきです。不意打ちはおやめください」

「もちろん全員に知らせるのも」大統領はつぶやいた。「さてと、びっくりするようなことを教えてやろう。これからわたしがなにをしようと思う？　ローズ・ガーデンに出て行って、この顔に笑みを貼り付けて、七面鳥に恩赦を与えるのさ。感謝祭、おめでとう！」

部屋を出ていく大統領を見送りながら、この人にならどこまでもついていけるとマーティンは思っていた。大統領に対する評価はがらりと変わった。頭が切れて決断力があり、いまこの部屋にいる面々のような有力な人間を、意のままにあやつるすべを心得ている。

その面々はみな、大統領のあとに続いて出ていった。マーティンは完全に忘れ去られ、あとにひとり残された。この会議で彼が果たした役割は歴史には残らないだろうが、自分がなにをしたかは

わかっている。いま起こりつつある事態を食い止めるなら、ただちに断固とした手段をとるしかない。

NASAがUFOについて例の発表をしたのは一年前のことだったが、いまにして思えば、あれは賢明なことではなかったのでは。UFOが別の惑星から来たエイリアンのものなら、発表してもとくに害はないだろう。しかし並行宇宙が関わりとなると、それをこちらの人間が信じるかどうか、こちらの世界への侵入しやすさを大きく左右するのではあるまいか。あまり問題視されていないが、ここでは精神がひと役買っているのかもしれない。こちらの世界の人間が信じていなければ、かれらは〈通路〉を使えないのではないか。とすれば、NASAはそれと知らずに、先人の知恵によつて閉じられ、聖なる遺跡で封じられていた扉をあけてしまったのかもしれない。そしてそのせいで、遺跡は破壊されてしまったのだ。

彼は携帯電話を取り出した。電波が届いているか心配だったが、大丈夫のようだ。リンディに電話をかけた。「これから帰るよ」

「飛行機に乗ったんじゃないの？」

「寄り道したんだ。すごい寄り道だよ」見まわすと、戸口に男が立っていた。シークレット・サービスだ。彼の世話係らしい。「すみません、カンザスシティに行きたいんですが」

「ナショナル空港へどうぞ。TATとブラニフの便があります」

「じつを言うと、空軍のジェット機でここまで送ってもらったんです。だから、その——」

男はにっと笑った。「われわれの仕事はあなたをここへ連れてくることだった。それはもう終わ

りました」

「そういうことですか」

「そういうことです」

「マーティン、どうしたの」リンデイが訊いてきた。「だれと話してるの？」

「空港からまた電話するよ。何時ごろそっちに着くか連絡する」

身内につのる恐怖を呑み込んだ。いまはただ無事に家に帰れるように、まだ時間が残っているようにと神に祈るばかりだった。